

「詠宝劍詩」の作者をめぐる問題——遼氏『先秦漢魏晉南北朝詩』補正一則

樋口泰裕

遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩・全北魏詩』（中華書局、一九八三年）。以下『全北魏詩』。卷一には北魏崔鴻の
手になるものとして「詠宝劍詩」が収録されている。全八
句を引用すると次の通りである。

寶劍出昆吾	宝劍	昆吾より出づ
龜龍夾采珠	龜龍	采珠を夾む
五精初獻術	五精	初めて術を献じ
千戸竟論都	千戸	竟に都を論ず
匣氣衝牛斗	匣氣	牛斗を衝き
山形轉鹿盧	山形	鹿盧転ず
欲知天下貴	天下の貴を知らんと欲すれば	
持此問風胡	此れを持して風胡に問え	

遼氏はこの詩の出典を挙げて「御覽三百四十四作梁崔鴻」と述べている。御覽とは『太平御覽』のことで、確かにその巻三百四十四の兵部劍にはこの詩を収めて作者を

「梁崔鴻」に作っている。遼氏は『太平御覽』の他に出典を挙げておらず、従つてこの詩の作者を北魏崔鴻に改めたのはまずは氏の創見によつたものと思われる。改めた理由は明らかにされていないが、恐らく南北朝時代を通じて、崔鴻の名を持つ人物は北魏に見えるばかりであることによるのだろう。正史など現存する史料の中、梁王朝に崔鴻なる人物は見当たらないのに対し、北魏の崔鴻と言えば、『十六国春秋』の作者として後世に名をよく知られた文人である。以上の事情を踏まえれば、遼氏が『太平御覽』の伝える梁崔鴻を北魏崔鴻に改めたことにも、まずは一定の道理があると云つてよいだろう。因みに『先秦漢魏晉南北朝詩』に先立つ馮惟訥『詩紀』、丁福保『全漢三国晋南北朝詩』などはこの詩を収録していない。

遼氏が「詠宝劍詩」の作者とする北魏の崔鴻という人物について簡単に紹介しておく、崔鴻、字は彦鸞、東清郡

河鄒の人。その墓誌銘に孝明帝の孝昌元年（五二五）に四十八歳で没したと述べられているのに従えば、孝文帝の太和二年（四七八）に生まれたことになる。叔父に孝文帝、宣武帝、孝明帝の三代に互って重用された崔光がいた。幼い頃から読書を好み、博く経史を綜べ、孝文帝の時に彭城王元勰の国左常侍となり、宣武帝の時に起居注を勅撰し、また、孝明帝の時には崔光の後を継いで国史編纂に携わり、後に黃門侍郎に遷り、散騎常侍、齊州大中正を加えられた。『十六国春秋』を完成させたのは正光三（五二二）年、四十五歳の時のことである。南朝で言えば、南齊末から梁武帝の普泰年間の頃に生き、同時代の文人としては、北朝には李謐、鄭道昭、袁翻、陽固、南朝には蕭子恪、王籍、劉孝綽、王筠などがいた。北魏末の文人である。『魏書』卷六十七及び『北史』卷四十四に本伝が載り、また他に墓誌が伝わり、これらの資料によれば、実用文の創作に長けた人であったようである。『十六国春秋』以外に著作は伝わらず、別集などが編纂されたという記録もないが、当時の北朝社会では詩を作ることが社交手段の一つとなっていたから、詩の数首を創作していたとしても不思議なことではない。

しかし「詠宝剑詩」の作者を北魏崔鴻と看做すことに

は、幾つかの問題がある。一つは、そもそも北魏崔鴻とする説は遼氏の創見であって、先に述べた通り、そこに理由がないわけではないけれども、作品と作者を結び付けるような必然性を持つまでもなく決して至っていない。その処理の仕方にはいささか便宜的に過ぎる感もあるだろう。また一つの問題は、この詩の作者については、実は遼氏が挙げる『太平御覽』以外にも別の伝承があるということである。筆者が確認し得た限りにおいて、この詩を伝える最も古いものは、唐徐堅撰『初学記』である。その卷二十二武部剣には「梁吳均詠宝剑詩」に続けて「崔融詠劍詩」として収められており、いつの時代の人物であるのか明示されていないが、ジャンルごとにおよそ時代の順に従って作品を並べる該書の体例からすれば、「崔融」を梁代以降の人物として収録していたことはほぼ間違いない。次いで宋代に編纂された書物でこの詩を録するものとしては、先に挙げた「梁崔鴻」に作る『太平御覽』の他、吳淑『事類賦注』、計有功『唐詩記事』が挙げられる。前者ではこの詩を引用して「梁崔融」の作とし、後者では「唐崔融」の作としている。梁の崔融なる人物は、現存する史料の中には見えず、わからない。唐の崔融は初唐期に活躍した詩人である。二説はそれぞれ後代に至っても引き継がれることと

なり、『淵鑑類函』には「崔融」の作として載り、その名に国号は冠せられてはいないものの、「梁吳均」の作品に續けて引かれ、またその後に「唐李慶」の作品が録されているので、梁代の作品として収めているようであり、また、明の陸時雍撰『唐詩鏡』、降って清代に編纂された『全唐詩』などはいずれも唐の崔融の作としてこの詩を載せている。こうして見ると、古いものの中で「崔鴻」の名に作るものは『太平御覽』の他にはなく、また創作の時代に至っては、明示しないものを除けば、梁代か唐代かといずれかに分かれるのみであるから、遼氏の「北魏崔鴻」の作とする説は、実はかなり問題のある説であることがわかるだろう。「詠宝剑詩」は一体誰の手によるものなのか、或いはいつの時代に作られたものなのか。

「詠宝剑詩」の作者ないしそれが作られた時代を明らかにすべく、翻って作品の側から検討を加えることとしよう。そこで、詩全体の形式に着目すると、この詩はいわゆる律詩の基準から見ても、非常に完整されたものであることがわかる。はじめに韻律の観点から言えば、この五言八句は完全に律詩の平仄の規則を遵守している。詩の平仄を記号で表記してみよう。

●●●●○
○●●●○
●●●●○
○●●●○
●●●●○
○●●●○
●●●●○
○●●●○

所謂仄起式で、一句中の二四不同を守り、また一聯中の反法、二聯間の粘法をも遵守し、更に言えば、孤平、平三連、仄三連といった禁止規則も犯しておらず、完全に律詩の規則に合致していることがわかる。周知の通り、南齊王朝の永明期以降、南北朝文人たちの間では韻律に対する意識が次第に高まってくるが、当時の韻律は沈約八病説に代表されるような、四声律に基づいたより煩雑な規則であり、平仄律に基づいた近体詩の規則とは異なるものであった。北朝の状況から言えば、温子昇等の北魏末の詩人たちの間では、八病の他、二四不同に対する意識（但し、あくまで四声律における二四不同であつたと思われる）が芽生えつつあったが、句と句、聯と聯との関係については、まだ注意されるには至っておらず、東西分立後、北齊、北周の頃に至つてようやく二句の関係に注意が及ぶようになって、時に一聯中に粘法を用いたり、また時に二聯間に反法を用いたり、なお試行錯誤的な段階にあった。そうした当時の状況を顧みて、北魏文人の崔鴻が「詠宝剑詩」の

ような韻律上、完全に律詩の規則を遵守した作品を創作し得たということは、偶然にしても考え難い。一方、南朝側の状況は、総じて北朝よりも先進的であつたには違いないが、全体を通じて見れば、南朝後期に至つてもこれほど完整した作品は決して多くないのであつて、崔鴻或いは崔融なる人物は詳らかではないけれど、やはり梁代に創作されたものとも考えにくいのである。

韻律に加えて、対句もまた律詩の基本的要素である。次に対偶という点から見てみると、八句中、頷聯と頸聯が対句であるから、改めてこの作品が典型的な律詩であることがわかる。いま特に注目すべきは、頷聯の対偶である。

「牛斗」は牽牛星と北斗星、即ち星名であり、「鹿盧」は轆轤、つまり器物の名であるから、熟語としてのことばの意味からすれば正確な対、所謂「的名対」をなしてはいないが、語の構成要素である「牛」と「鹿」が、字面上対偶を構成していると言える。空海『文鏡秘府論』二十九種対の中では、こうした文脈中の義とは別に字面上で対をなしている対偶を「字対」と称している。その解説に次のようにある。

或曰、字對者、若桂楫、荷戈。荷是負之義、以其字草名、故與桂爲對。不用義對、但取字爲對也。

或ひと曰く、「字対とは、『桂楫』『荷戈』の若し。『荷』は是れ負の義なるも、其の字の草名なるを以て、故に『桂』と対を為す。義を用て対せず、但だ字を取りて対と為すなり」と。

『文鏡秘府論』は、当時空海が目にし得た南北朝・隋初唐の頃に著された種々の詩論書からの引用が叙述の大半を占め、ここに引いた部分は元兢『詩髓脳』からの引用であると言われている。字対の例として挙げるのは「桂楫」と「荷戈」である。桂楫は桂の櫂、荷戈は戈を担うこと。文脈中のことばの意味からすれば「桂」と「荷」は対偶にならないが、「荷」は別にハスの意義も持つているから、字面からすれば植物の名を表す漢字同士で対偶になっている。様々ある対句の種類の中でも、字対は通常の「的名対」などと比べて、技巧性の高い、その分遊戯性も多分に含まれた対偶と言つてよいだろう。

一般的に対句技法は、中国文学史上、修辞主義に傾いた南北朝時代に大きな発展を遂げるものとされるが、實際、南朝と北朝では事情がやや異なる。北朝について言えば、文学の南朝化が進行する北斉、北周の東西分立期に至ると、対句表現自体が多くなり、また技巧的な対句も間々見られるようになるのであるが、北魏における対句表現は同

時代の南朝と比べるとなお素朴さを残していたと言える。

実際、字対について言えば、北魏の作品にはほとんど例を見ず、北齊、北周の頃に至つてようやく散見する程度である。一方の南朝文学では、字対は特に梁代以降になると、枚挙にいとまが無いほどよく見られるようになり、たとえば、『顔氏家訓』文章篇に引かれる梁蕭子暉「隴頭水」の「北注徂黃龍、東流會白馬」の「黃龍」と「白馬」の対偶がその例として比較的有名である。もつとも、この「黃龍」と「白馬」の対偶は、固より地名対である上に、形式要素である「黃」と「白」、「龍」と「馬」の字対を構成しているのであつて、先の例よりも更に緻密であり、当時の南朝文人たちの対句技法における技巧性の高さを見るに足る例となつてゐる。以上のことからしても、「詠宝劍詩」を北魏崔鴻の作として考えるのは相当無理があると言わざるを得ないだろう。

ところで、『文鏡秘府論』二十九種対には、先に見た元兢『詩髓腦』からの引用と併せて、

或曰、字對者、謂義別字對、是。

或ひと曰く「字対は、義の別にして字の対するを謂う、是れなり」と。

という、元兢の説と同旨の論が引かれていたのであるが、いま「詠宝劍詩」の作者を考える上で注意されるのは、それが先に名前の挙がつていた初唐崔融の『唐朝新定詩格』からの引用であると考えられていることである。

崔融（六五三—七〇六）、字は安成。齊州全節の人。八科高第に挙げられて、中宗が太子の時に侍読となり、後に国子司業に拝せられた。李陵、杜審言、蘇味道と共に文章四友と称され、華婉の詩風を以て有名であつた。『新唐書』藝文志には文集六十巻が著録されているが、原本は久しく佚し、詩について言えば、『全唐詩』に一卷十八首が残るばかりである。彼の著と伝えられる『唐朝新定詩格』については、中国の目録類には記録が見えないが、『日本国見在書目録』小学家類に見える「唐朝新定詩体一卷」がそれに当たるものと考えられる。無論、「字対」という修辞技法自体は、南朝後期以降、多くの文人たちによつて共用された技法であつた。ただ、『文鏡秘府論』に引かれる発言があつたという事実から、少なくとも崔融自身、この技法に対して非常に意識的であつたことには違いないだろう。そこで更に注目されるのは、唐崔融の現存する詩のうち、字対を用いた例が数例看取できることに加え、なかでも「登東陽沈隱侯八詠樓」中の「排階銜鳥衡、交疏過牛

斗」二句における「鳥衡」と「牛斗」の対偶が、用語などの点において先の「詠宝剑詩」中の字対と類似していることである。もっとも、二語はいずれも星の名称であるから、固よりの名対の関係にあるのであるが、「鳥」と「牛」は、文脈上の意味とは別に字面上の対をも構成しており、先の「鹿盧」と「牛斗」の対における「鹿」と「牛」の関係におよそ等しいと言えるだろう。これら二つの類似した対偶表現だけを取り上げて直ちに同一の作者の手になるものと考えすることは無論できない。ただ、以上に述べてきた事実を併せ考えながら、改めて北魏崔鴻（遼氏）、梁崔鴻（『太平御覧』）、梁崔融（『事類賦注』）、唐崔融（『唐詩記事』『唐詩鏡』『全唐詩』）という複数の伝承を並べ較べてみるならば、「詠宝剑詩」の作者として最も蓋然性が高いのは、唐崔融であると言つてよいのではないだろうか。

「詠宝剑詩」を遼氏が自ら輯校する総集に収録したことは、『太平御覧』、『事類賦注』といった、該詩を梁代の作とする伝承がある以上、妥当であるし、また、遼氏以前の専ら南北朝期以前に創作された作品を集めた総集類においては見落とされてきたという事実を考えると、評価されるべきことである。ただ、その作者を北魏崔鴻に改め、その

詩を『全北魏詩』の中に収めることとしたのは恐らく誤りであった。一つは、そのような伝承はないという点において。また一つは、作品中の韻律及び対句技法という点からして北魏文人の手になるものとは考え難い点において。以上に見てきたように、複数の伝承と作品とを突き合わせたとき、その作者として最も蓋然性が高いと思われるのは唐の崔融である。従つて、遼氏『先秦漢魏晉南北朝詩』における該詩の扱いについては、作者名を崔鴻に作るか、崔融に作るかという問題がなお残るとしても、まずは『全梁詩』中に録し、加えて、『唐詩記事』、『全唐詩』などの唐崔融の作とする伝承もあることを校記に付すというのが、最も妥当な処理の仕方になると言えるだろう。